

誕生日プレゼントの話

やゆよ

「なあ、今欲しいものとかない？」

「えっなんで？」

「えっなんで？いや、そうだな。ほら、あれだよ」

「あれ？」

「うん、確か半年前くらいにさあー」

「動くなあああああ」

「やめろ！ 早まるな、そんなことをして一体何になるっていうんだ」

「うるさいうるさいうるさい！ こいつが、こいつさえいなければ俺は」

「だからって数学の教科書を燃やしてどうする！

そんなことをしたら、もう、一生数学の時間が気まづくなるぞ」

「気まづく…はっ！ お、俺は一体、何を」

「よし、落ち着いたようだな。お前は今、一秒に一センチ動く点Pを見て発狂していたんだ」

「そ、そうだ。いつも出るたびに動く点Pを見て、俺は、俺は…点P動くなあああああ」

「やめろー！」

「―ってことがあったじゃん？」

「うん、あったな」

「んできあ、確かその次の日に―」

「なんで、なんであんなひどいこと…！」

「ど、どうしたの！？」

「…あいつ、隠してたんだよ」

「隠してた？」

「ああ、料理対決で最後、隠し味として入れやがったんだ」

「入れた？ 一体あいつが何を入れたんだ？」

「…」

「おい、話してくれよ。お前のそんな辛そうな顔、俺は見たくねえよ」

「…ああ、辛いよ、滅茶苦茶辛い。あいつのポテンシャルは凄まじいからな」

「！？」

「気付いたようだな」

「ま、まさか、あいつが隠してたのって…」

「ああそうさ。能力が高いあいつが隠してたのは」

「鷹の爪…！」

「…激辛だー」

「ああ、滅茶苦茶辛い」

「―ってことがあったじゃん？」

「うん、あったな」

「んでさあ、そのさらに次の日に―」

「ダサイ！ ダサすぎる！」

「はあ、今度は何がダサイんだ？」

「だってよお、考えてもみるよ。こいつは漢字だけ見たらめつちやオシヤレなんだ」

「オシヤレ？」

「ああ、もしここが日本じゃなくフランスだったらヴェルサイユ宮殿！ 花の都だぜ？」

「いやヴェルサイユ宮殿はぎりパリ郊外のヴェルサイユ市にあるから花の都、パリには含まれないね。因みに〇〇の都といえは水の都ヴェネツィア、音楽の都ウィーン、霧の都ロンドンみたいに海外観光地によく使われがちだけど実は日本にも都はあつて、仙台市は杜の都、宇都宮市は雷都なんて呼ばれたりするんだよ、かっこいいよね」

「へえー、かっこいいね……ってそうじゃないよ。なにいきなり主導権握ってんのさ、今から『こいつ』がなにか当てていく流れでしょ。話戻すけど、もしここがフランスだったなら、目の前にそびえ立つヴェルサイユ城、それを囲うは真つ赤な薔薇、そ

して出迎えるはオスカル様……という夢みたいな世界だったんだよ」

「んで現実は？」

「……目の前にそびえ立つ大仏、丘一面だけに咲くネモフィラ畑、そして出迎えるはハッスル黄門」

「ふむ……分かん」

「分かれよ！ 世界一高い大仏・牛久大仏に幻想的な青の絨毯・海浜公園のネモフィラ畑、水戸黄門のゆるキャラ・ハッスル黄門様だぞ」

「水戸……ああ茨城か。英語でローズキヤッスル、それでヴェルサイユ宮殿、なるほどね」

「うむ、めつちやオシヤレな茨城県なのだ」

「そっかそっかあ。じゃあさ、因みになんだけど、そのオシヤレな茨城県の県庁所在地、水戸は何の都って呼ばれてるの？」

「……納豆？」

「平城京じゃねえか」

「―ってことがあったじゃん？」

「……」

「……」

「……懐かしいよね」

「いや何の話だよ！」